

第 29 期新潟市社会教育委員会議

実施年月日	第 9 回 平成 23 年 9 月 30 日 (金) 実施		
会 場	市役所白山浦庁舎 1 号棟 2 階会議室	傍聴人	0 人
会 議 内 容	<p>1. 開会</p> <p>2. 報告事項</p> <p>(1) 各種大会等の参加報告について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「第 53 回全国社会教育研究大会京都大会」参加報告 ・平成 23 年度新任社会教育委員等研修会参加報告 <p>(2) 『子どもたちにかかわる地域の団体等の実態調査』結果報告書について</p> <p>3. 協議事項</p> <p>(1) 今後のスケジュールと建議の構成 (案) について</p> <p>(2) その他</p> <p>4. その他</p> <p>5. 閉会</p>		
出 席 者	<p>【社会教育委員】</p> <p>相庭和彦 板垣徳衛 伊藤裕美子 笠原孝子 川上光子 雲尾周 新藤幸生 中村恵子 西田卓司</p> <p>【事務局】</p> <p>朝妻教育次長 邊見教育次長 玉木生涯学習課長 坂井課長 (地域と学校ふれあい推進課) 山下課長 (中央図書館サービス課) 小川課長補佐 (生涯学習課) 原係長 相崎主査</p>		
資 料	<p>次第、座席表</p> <p><u>資料 1-1</u> 『子どもたちにかかわる地域の団体等の実態調査』速報報告書</p> <p><u>資料 1-2</u> 『子どもたちにかかわる地域の団体等の実態調査』補足説明</p> <p><u>資料 2</u> 今後のスケジュールについて</p> <p><u>資料 3</u> 第 29 期社会教育委員会議建議の構成について (案)</p> <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「第 53 回全国社会教育研究大会京都大会」参加報告 (笠原委員) ・「第 53 回全国社会教育研究大会京都大会」参加報告 (西田委員) ・平成 23 年度社会教育委員等研修会参加報告 (伊藤委員) ・ブックスタート開始記念事業について (中央図書館) 		
会 議 録	<p>1. 開会 (事務局)</p> <p>では、ここからは、相庭議長に進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。</p> <p>(相庭議長)</p> <p>皆さん、ご苦労さまでございます。</p> <p>それでは、議題に即しまして進めていきたいと思ひます。本日の出席につきまして、事務局より、よろしくお願いいたします。</p> <p>(事務局)</p> <p>本日は、梅津委員、南委員から欠席のご連絡をいただいております。また、西田委員は別の会議と重なりまして、3時半ごろ到着の予定となっております。伊藤委員から少し遅れるとの連絡が入っております。新潟市社会教育委員会議運営規則第 9 条の規定による、開催に必要な人数半数以上を満たしていることを報告いたします。</p>		

第29期新潟市社会教育委員会議

また、本日の会議について、傍聴の定員を5人として周知しましたが、傍聴希望はありませんでした。

(相庭議長)

それでは、議題に即して進めたいのですが、報告事項1「各種大会の参加報告」についてでございますけれども、本日、報告予定の西田委員が遅れて到着いたしますので、この報告事項は後に回し、報告事項(2)『子どもたちにかかわる地域の団体等の実態調査』速報報告書について」ということで、こちらから進めていきたいと思っております。事務局より説明をお願いします。

(資料説明 「『子どもたちにかかわる地域の団体等の実態調査』速報報告書について」)

(相庭議長)

ごくろうさまでした。

今、かなり細かく事務局から説明していただきました。内容について確認できたところで、ご意見等がございましたら、全体をながめてみて、こういう傾向があるのではないかとか、あるいはこういうところはどうかののだろうかとかというフリートークを10分くらいしたいと思っております。どの委員からでもけっこうです。いかがでしょうか。

(雲尾委員)

傾向というよりも確認なのですけれども、資料1-1の25ページの、問1に関係することなのですが、新潟市子ども会の団体で、子どもたちにかかわる活動を行っていない6団体ですとか、ボーイスカウト等の「以前は行っていたが、今は行っていない」2団体とか、スポーツ少年団でも同じように行っていないということがあるので、そもそもこれは休眠団体なのか、それとも、設問の文章から、普段の活動でなくて地域においてというふうに特別にとらえてしまったのかという、少し不思議な数字が出ているのですが、これはどの団体というのはわかりますか。

(事務局)

調査票には団体名などを記述するところがございますので、その調査票を確認すれば、どの団体かは確認できます。今日はそこまでは確認してきませんでした。

(相庭議長)

私も同じように不思議で、クエスチョンがあるのですが、PTAで子どもにかかわる活動を行っていないというのは想像しにくいのですが。

(伊藤委員)

子どもが少なくなったとか。

(雲尾委員)

親の学習会だけして、子どものことは知らないということでしょうか。

(笠原委員)

子どもではなくて、親の学習会に偏っているのかと、私は思いました。

(新藤委員)

保護者同士の交流会とか、親の球技大会とか。

(相庭議長)

そういう感じでいいのでしょうか。

(新藤委員)

子どものことは学校に任せて、自分たちの交流を深める行事をやっているところもあります。

(相庭議長)

では、子ども会もそんな感じなのですか。子ども会も、子どもそっちのけで。

(伊藤委員)

地域の子どもがいなくなったとか。

第29期新潟市社会教育委員会議

(相庭議長)

ボーイスカウトは、おそらく休眠団体なのでしょう。

(新藤委員)

多分、指導者たちだけが残って、子どもたちがいなくなってしまったと。ボーイスカウト同士の連絡協議会みたいなものがあって、そこには役員として指導者たちは出るけれども、実際、現場に戻ると子どもたちはいないと考えられますね。

(相庭議長)

少子化してしまったから、ないということですよ。

(新藤委員)

考えられますね。納得いきませんが。

(生涯学習課長)

ボーイスカウト、ガールスカウトの場合は分からないのですが、PTAや子ども会の場合ですと、必ず子どもたちがいるわけですので、しかも子ども会などは、子どもがいないと会に入れない仕組みです。

(伊藤委員)

数名の少人数になると、わざわざ活動するほどの人数ではないとか。

(雲尾委員)

設問が「地域において」という文言があるので、学校において行っていて、地域ではやっていないというような解釈をされてしまった可能性もあります。

(生涯学習課長)

そういう誤解が少しあるのではないかと思います。

(相庭議長)

PTAだと役員は必ず育成協に入るでしょう。育成協とPTAというのは似ていますよね。同じところでダブっていますよね。

(新藤委員)

微妙です。完璧にダブっているところと、全く別組織とあります。

(相庭議長)

全く別もあるのですか。

(板垣委員)

育成協というのは地域の行事なのです。PTAというのは子どもの親の行事ですから。

(新藤委員)

確かにPTAと限りなく一緒の地域もあるし、その一方で、コミュニティ協議会などと兼務をしている育成協というものもあります。

(相庭議長)

私の経験でいうと、PTAの役員の中に育成協担当がいると。

(新藤委員)

そういう地域はありますけれども、自動的にPTA会長は育成協の何をやるとか、そういうところもあります。

私も何人かに、こんなアンケートが届いたということで相談を受けたのですが、大体、担当者一人で回答を考えているようで、大分大変だなと。組織全体で回答を考えたのではなくて、おまえが書いて出せと言われて、もたされたはいいけれども、どうしたらいいでしょうかと。その部分で、解釈が微妙にずれたところがあるのではないのでしょうか。アンケートですから、総体的に多いものを拾っていく部分もあるのではないのでしょうか。確かに特異部分も見捨てられないですけども。

(相庭議長)

ほかにかがでしょうか。

第29期新潟市社会教育委員会議

(新藤委員)

個人的には、来月、村上で発表するので、この資料がちょうど届いたので、大変助かりました。おぼろげながら、きっといいのではないかと思っているものが、数字で出てくるということと、地域の中では、子どもたちにかかわる活動でどのようなことがいいですかということ、あいさつというのが非常に多かったのですが、基本的な問題かなという気もする一方で、あいさつ以外に思い浮かぶことがなかったのかなという、少し寂しい感じもしました。

(相庭議長)

ほかにかがでしょうか。

(中村委員)

自由記述が非常に膨大で、書いてある視点もいろいろで、アンケート自身に対するコメントもあるし、地域の教育力を上げるために、これから何が大事かと書いているところもあるし、自分の活動はこうだからという、自分の活動の視点から書いてある人もいるしということで、多種多様に及んでいて、アンケートの自由記述の中で、いろいろな対象としたがために、どうしてもアンケートの設問が抽象的で、答えづらかったというのが幾つも出ていて、その答えづらさを埋めるために自由記述が膨大になっていて、答えられなかったところをお答えしましょうみたいな感じで、多分、これだけの自由記述になっているのだと。それぞれの団体で活動されている方が書かれている熱意というものも当然あるかと思うのですけれども、これは量的なもので示すことも大事なのだけれども、質的なものをどう処理していくかということが一つの課題なのではないかと。かなり重要な提言があって、これから建議ということで考えるときに、ここのデータをどう扱っていくかという視点は落とせないのだろうと。少なくとも、例えばこのアンケートに対するものだという整理が必要なのではないかと思うし、似たものに対して、これはこういうことを言っているのだという要約が必要なのだろうと思います。

そこのとこととあわせて見ていかないと、量的なものを表すと分かりやすくいいのだけれども、逆に漠然として、具体的にそれをどうこれから行政として取り組むかということにはなかなか結びつきにくい。むしろ、ここから出ているいろいろな言葉、事例の一つ一つを丁寧に拾うことで、ということが大事かということ、具体的にどういうことをしていくのかということが出てくるかと思うので、これだけが資料ではないのだけれども、まずこれをどう丁寧に扱うかということを考えていく必要があるのではないかという気がしました。

(相庭議長)

いかがでしょうか。

自由記述はすごくおもしろいものがいっぱいありますよね。

(中村委員)

広い視点で言っている人もいるし、ピンポイントのところでおられる人もいると思うのだけれども、でもやはり、少し整理して生かしていくことを考えたほうがいいのではないかと思います。

(事務局)

実は、今年の調査も膨大な自由記述がありまして、同じようなものはまとめたり、項目ごとに整理してまとめたのですが、今回、そこまで作業ができていなくて、まとめきれってなかったのですが、今、委員がおっしゃるように、報告書の段階では、整理をかけて、まとめていく作業をします。それが固まりましたら、早めにお示ししたいと思っていますので、よろしくお願いします。

(相庭議長)

自由記述のまとめ方は難しいですね。巻では、コンビニエンスストアで包丁を振り回す事件があったとか、それを押さえ込んだとか。

(中村委員)

複数の人が言っているものというのは、拾い出していくというか、これはかなり特殊性があるな

第29期新潟市社会教育委員会議

と。そこまで挙げてしまうとわけが分からなくなってしまうからいいと思うのですけれども、同じことに括られるのかなというものについて、しっかり整理すると。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。

(伊藤委員)

分からないのという考えなのですけれども、75ページで、学校支援ボランティアのように学校の活動に地域の人に参加しやすくするというのを育むために、どこに力を入れたらいいかということのトップが、小学校PTAや中学校PTAでパーセンテージが多かったということですが、これについては、PTAが自分たちだけでは手が足りないので、地域の人に助けを求めたいとともとらえられるし、逆に、学校支援ボランティア、コーディネーターさんなどの機能に対する期待度が高いからこれを選んだのが多いともとらえられるし、トップがここだという考え方もいろいろできると勝手に思ってしまったのですけれども、学習支援ボランティアという活動があるということ、このアンケートを手元にして読んだときに、そういうものがあるのだと分かった団体の方たちもいたのではないかと想像も含めてできたのですけれども、そういう意味でも、答えにくいという自由記述のバリエーションがあるということもありますが、アンケートを届けたことで反応があったということについては、とても意義があったのではないかとということで、分析を充実させていただきたいし、新藤委員の10月のお話も楽しみにしたいと思っております。

(相庭議長)

10月のリクエストが出ました。

(中村委員)

今のことで、学習支援ボランティアということで学生を出しているのですけれども、1、2年生を出すと、まだ学校が分からないのに迷惑かけるだけだと悪いので、3年生の後期あたりから、教職関連の子たちを、学校についての理解が進む過程の中で出すようにしているのですけれども、学習支援ボランティアみたいなものは、学生以外に一般の地域の人もけっこう入っているものなのですか。

(伊藤委員)

例えばマランソン大会があるとみたいな、全部含むのではないのでしょうか。

(川上委員)

学校支援ボランティアというのは、学生のボランティアももちろんいらっしゃるし、一般の地域の方のボランティアもいらっしゃるし、PTAのボランティア、すべて含めて学習支援ボランティアという言い方をしたいと思います。

(生涯学習課長)

ここは「学校支援」と書かせていただいているので、学習支援とは違うものです。

(中村委員)

すみません。勘違いしました。学習支援と学校支援だと、学校支援の中にみんな含まれるのですね。見守りから何からみんな含まれるということですね。勘違いしました。

(川上委員)

今の学校支援ボランティアということでお話が出たので、私も携わっているのですが、興味深く見たのですが、自由記述のところ、とてもどきっとするようなことが載っていたので、今後の課題になるのかなと思うのですが、83ページの一番最後のところに、このような意見が載っていたので、これをどのように解釈していったらいいのかと思いました。

(伊藤委員)

先生方に学習活動を一生懸命やってもらうために、コーディネーターさんがボランティアを募って活動するから、先生たちのお仕事は教育をきちんとやって、その部分を支えるのを一般の方を含めてと伺ったのですけれども、そのように思うと揺れがなくて、頑張っていていただければいいかと

思います。

(川上委員)

たくさん入っていらっちゃって、いろいろな活動があると思うので、そのあたりはこれからいろいろと出てくるのかなという心配もあり、また、エネルギーになったりする部分もあるのですが。

(相庭議長)

これはよく出る意見なのです。先ほど少し中村委員も、学習支援と学校支援とごっちゃになりましたけれども、多くの人たちは学校に支援しに行くというと学習支援だと思っているのです。その前提が、学級崩壊の中に子どもたちがいると。そういうものを直すのではないかとか、学校支援全体が分からなくて、その局面だけをとって、学校の先生の力量不足だから、それをほかの人たちが支えているのだという誤解がけっこうあるのです。そこから出てくるご発言なのです。ですから、入っている人たちからこんな意見は絶対出ませんから、全然分からない話だなと。「質のいい教師が使命感を持った」とありますけれども、またこれがおもしろくて、変な話で、この論理を立てると、学校支援ボランティアの人がたくさん入っている学校は質の悪い学校、質の悪い教師がたくさんいるところだと逆転してしまうのです。それを知らないのです。

(川上委員)

それだけ周知が足りていないということなのでしょう。

(相庭議長)

もっときちんと周知していったらいいと思います。どういうことをやっているかということがよく分かっているから、こういう意見が出るのです。

(川上委員)

平成26年度までに全校配置になる予定で、いろいろな方々がお手伝いに入ったりしてくださっているのです。

(相庭議長)

基本的なところで、間違っていると思っているのは、学校にいろいろな人たちがかわるということは、学校にとって絶対にプラスなのです。

(川上委員)

というふうには伺っているのですが。

(相庭議長)

それは仮に授業補助であろうと、何であろうと、先生のお手伝いであろうと、全部プラスなわけです。地域の人たちからのいろいろな声を聞くということ自体が、これは先生の質の問題ではなくて、先生たちが授業を遂行していくためには、非常に重要な情報になってくのだということに対する認識がまだ低いのです。そういう意味では、学校の先生の専門職性が高いという期待は非常にありがたい話なのですが、実際に教育を運営していくとなると、こういう意見だと難しいですね。私もそう考えます。

(中村委員)

確かにいろいろな立場で入るということは非常にいいことだし、それが学校のためになることももちろんあるのですが、私は前に小学校の教頭を務めていたのですが、たとえ登録したとしても、例えば自分はこういうことをしたいと思っていたのだけれども、それが自分のためになるということも、自分を犠牲にすり減るだけということでは、やはり入ることによって自分のためにもなるということが大事かと思うのですが、それがうまく機能しているところは非常にいいと思うかもしれないけれども、例えば制度があったとしても、そこにニーズの齟齬があったりすると、なかなかという部分もあって、多分、うまくいっているところはうまくいっているのだけれども、何でもいから、どういう形でもいから入れればいいのかということではないという、そういう一つのとらえとしても受け取っていいのかなと。何でも入れればいいのかというような。もちろん、いろいろな人がいろいろな立場で入ってくるのはいいのだけれどという、そこら辺のとこ

ろはどのようなのですか。

(川上委員)

最終的には、人だと思えます。続くのも、続かないのも人とのつながりで、そこがしっかりつながって、お互いに意義があったり、子どもたちの様子が手に取るように分かれば、皆さん継続すると思えます。

(中村委員)

ほかのアンケートもそうなのですけれども、設問の中で、うまくいっているとか、よかったというのは、何か知識を得たとかというよりも、交流があったとか、子どもとのつながりができたとかという、人的なつながりに価値を置いているのだなと思いました。ボランティアに入ることによって、そういうことができるようなボランティアの入り方であると、きっと双方にとっていい形になるのではないかと思います。確かに別な視点もあるのだろうと思うけれども、あえて言っていたほどのメリットを酌み取ると、何でも言えばそれでオーケーみたいな感じではないけれども、入れていく工夫というのがあると思うので、そこに対して配慮しながら入れていくことの必要性はあると思えます。分かっていたいただくことが大事ですね。

(相庭議長)

やはりこういう意見が出るというのはすごいと思うのは、地域うんぬんの前に、学校を何とかしろと。学校が大変だというのはよく分かっているのだけれども、学校協議会みたいなものが立ち上がってきていて、地域の人たちと学校の先生が話をする必要があるのでしょうか。学校が現代社会においてどういう状況で、先生たちはどのように考えていて、地域の人たちの声をどういうふうに聞きたいかということをする時期にきているのだと思うのです。そういうことを意思疎通しないで、ボランティアだと言って、参加した人は大体分かるのですけれども、外から見ると、何をやっているのだろうと見えるというのは、そういう表れだという気がします。

(伊藤委員)

具体例なのですけれども、今朝まで1週間、中学校のあいさつ運動、あいさつつかないのかと先ほどおっしゃられたのですけれども、朝7時40分から街頭で、地域の小学校で本を読んでいた子たちのあいさつをお手伝いしたわけなのですが、そのときにも、たまたま小学校での活動をしていて、コーディネーターさんの小中の連携があったので、小中のコーディネーターたちも協力しあって、参加して、それは理解しましたし、それは歩み出したばかりの活動だと思うのですけれども、生徒さんや先生たち、校長先生、教頭先生もときどき街頭を回ってくださったりで、地域の人に声を出す活動で、子どもたちの顔が毎日変わってくるというか、あいさつのリアクションがだんだん出てくるとか、そういうことを1週間味わいながら参加しました。お手伝いではなくて、得るものもあるというか、輝いていく若い子たちの顔が見れてよかったというお手伝いの楽しさ。雨の日もあったけれども、自転車で急いで、お弁当作った後に駆けつけたのですけれども、あいさつを今年やりました。また来年もと、一つ一つ、賛否両論、そのときどきであると思うのですが、試行錯誤しながら積み重ねていって、声をかけて参加をいただいて、お一人お一人理解できる人が増えていけばいいかなとかみしめた今朝だったのですけれども、ただしこれでよかったとあって、そのやり方がどこにも当てはまるような状況ではないということで、それぞれの地域や学校の周りの環境にあったやり方というものがあると思うので、各学校や地域のコーディネーターさんたちが中心になるのでしょうか、いいふうに機能し始めているように、地域の一人としても実感しているので、そういういいものが続くよう、予算などの部分をよろしくという気持ちでおります。

(相庭議長)

おはようございますと声かけをする運動がありますが、それを全部いいとは思いませんが、私個人は、PTA会長が長かったものですから、マンションもそうですけれども、和合町の、今は成人になる連中は全部分かるのですけれども、小さいときからずっとやっていると、どんなにつっぱって、この間、おまわりさんと追っかけっこしていましたが、そういう連中も、夜、声をかけると、「相

第29期新潟市社会教育委員会議

庭さん」と、絶対変なことは言わないです。これは不思議なもので、何も声をかけていないと、このやろうなんていう感じなのだけれども、夜飲んで帰ってきたときに、ちょうどもめていて、「何やってるんだ」と言ったら、「相庭のおやじ」と。「お前、何やってるんだ」と、こいつがどうとかという話ができるのです。これは不思議なものです。今でもすごくよくおぼえているのだけれども、毎日、うちの息子も遅刻するものだから、いつも車に乗せて、保育園に送っていたことがありました。あのころ世話になったということもあるのでしょうか。

そういう意味では、地域社会というのは、こういう立場で言うのも何なのですけども、行政がつくってやるというよりも、そこに住んでいる人たちが声をかけあって、別に格好いいことを言わなくてもいいのだけれども、アホなことでもいいのですが、声をかけていくということがすごく大事なような気がします。私は、自分の息子の同級生というのは、和合町の周りは大体分かるのです。そろそろ20歳になるので、おもしろいですね。そう考えると、声をかけていくというのは、本当は運動なんかしなくても、地域社会でやるのが一番いいのですけれども、今、こういう社会ですからね。小さい子には声をかけないようにしています。

この間、声をかけたら、おまわりさんに職務質問される場所でした。やめようと思いました。パトカーの前で「よう」とちびに声をかけたら、止まられて、ぎろっと見られたから、今回はやめようと思いました。せちがらい世の中ですから、しょうがないのかと思いますが。そう考えると、こういう意見が出てくるのは分かるような気がするので、学校を中心として、学校から発信していく必要があるような気がします。

(板垣委員)

私は中学校なのですが、今の交通安全の話でもそうだし、あいさつでも学校支援ボランティアでも、子どもたちが地域の方々といろいろなところでふれあったり、話をしたりするというのは、やはり子どもの教育の幅が広がると思うのです。学校の方針を地域に発信して、地域の人からも学校に来てもらうという方針でやっているのだけれども、問題もあります。地域の中でも、ある子が道路で遊んでいるのだけれども、学校の先生、何とかしてくれと電話がくるのです。あなたのうちの前で遊んでいるのですから、お宅で注意してくださいと言いたいのですが、先生方が行って注意するという状況もあります。また、先生方の中でも使命感があって、地域の人が学校に入ってこなくても、自分たちで子どもの教育をやろうという考えがまだ残っているのです。そういうことを開拓したり、意識改革をはかりながら、学校と地域に連携を深めようとしているのが現状です。

(相庭議長)

わりと中学校のほうが堅いですよね。小学校のほうが簡単に穴が空きますよね。中学校はどうかと思いますけれども、中学校の先生だと、どうしてもそうなのでしょうね。中学生はコココーラの自動販売機で買ってはいけないのに買っているよという、学校に電話を入れて、今、自動販売機で買っていたとか。

(板垣委員)

おたくの中学生だと。

(相庭議長)

中学のほうがどちらかというと厳しいみたいですね。学校文化なのかもしれないと思いますが。ほかにいかがでしょうか。

(中村委員)

ざーっと見て、大事なのはやはり人と人がいかにつながるということを実感できて、満足できるということを生んでくのかというのが一つの大きな課題だなというのが、通して言えると思ったのですけれども、もう一つ気になったのは、職業能力の開発または雇用機会の拡充を支援する活動というものが、すごく重要なわりには非常にパーセントが低いというのが気になります。今、子どもを健全に育成するのも大事なのだけれども、育成した子たちが、きちんと就職につながっていくという、そのところも非常に大事なことでないかと思って、そのところに対する、逆に、行政

第29期新潟市社会教育委員会議

から企業、団体に投げかけていく必要があるのではなかということ、これを見て思いました。例えばこの前話があったのですけれども、企業がこんな社会貢献ができるということはいろいろあると思うのですけれども、一つは、例えば引きこもりの子たちというのは、コミュニケーション能力がどうしても乏しいわけで、コミュニケーションをつけて就業しなさいというのはなかなか難しいのだけれども、例えば配送作業や、お寺の掃除とか、コミュニケーション能力をあまり必要としない働き先があったらきちんと働けるということがあると思うのだけれども、そのミスマッチがあって、企業のやろうとしていることを大事にするということと、こんな社会貢献ができますという提案をして投げかけていくということも、これは一つの例なのだけれども、大事なわりには低いなと思ったのだけれども、そういうことをしていく必要があるのではないかと、このアンケート見て思いました。これは感想なので、意見でも何でもありません。

(相庭議長)

ありがとうございます。

細かく見ていくと、おもしろい意見がいっぱい出てくると思うのですが、これをまとめるにあたりまして、雲尾先生と私のほうで整理をしなければならぬのですが、皆さんから、この辺をこう書いてほしいとか、こういうものを入れてほしいというご意見がありましたら、事務局に出していただけたらと考えております。

ここで、10分ほど休憩を入れて、次の協議事項、今後のスケジュールと建議の骨子(案)について議論していきたいと思えます。

10分ほど休憩いたします。

(休 憩)

(相庭議長)

それでは、始めたいと思えます。

協議事項でございますが、建議の骨子(案)について、建議の構成、今後のスケジュールについて話を進めていきたいと思えます。事務局よりご説明願います。

(資料説明 「今後のスケジュールと建議の構成(案)について」)

(相庭議長)

今ほど事務局からご説明がありました、今後のスケジュールと、第29期社会教育委員会としての建議の構成(案)ということで出てきましたが、ご意見等をお伺いしたいと思えます。最初に、今後のスケジュールでございますが、このような流れでよろしいでしょうか。

(相庭議長)

では、今後のスケジュールについては、このような流れということで大丈夫でしょうか。雲尾先生が団体の調査を書いたり、こちらも書いたりということで、たくさん書くものがありますね。

(雲尾委員)

気がついたらいっぱいありますね。

(相庭議長)

気がついたら、私もたくさん書くことが出てきました。

では、今後のスケジュールについてこのように頑張っていきたいと思えます。

次に、構成についてはいかがでしょうか。特に、事務局の説明だと、1章「家庭と地域の教育力について」ということで建議を出していったらどうかと。それは実際に調査をかけておりますので、その調査のデータからもいえるだろうということです。今後、社会教育に取り組むべきことということで、学・社・民の連携の中ということで、いろいろとキーワードが出ていますが、眺めて

第29期新潟市社会教育委員会議

みていかがでしょうか。私の印象が深いのは、前回の調査から、地域で隣近所のつきあいがあまりないところとか、つきあいのない世代というのは、わりと家庭の教育力に対して見方が厳しいという記憶があるのです。60歳以降の人たちだと、わりと地域のつきあいもあると。

そういう人たちは子育てに対してわりと寛容で、子どものしつけがなっていないとかという意見が低くて、20代、30代で地域社会との関係が低い人たちから子どもたちを見ると、今の子どもたちはなっていないという意見が強かったなという印象を調査で受けました。地域の教育力が低下しているというときの見方で、地域社会の中で生活する人々が孤立化しているということなのでしょうね。孤立化していて、孤立化している人たちから見ると、地域の教育力は低下していると見えるのだらうと。そういう印象を受けました。

よく分からなかったのですが、教育の現場からと、研究者からとは見方は異なるのではないかとすることはどういふことでしょうか。分からなかったのですが、見方が違っているということなのでしょう。

(事務局)

補足なのですが、第1章について、前回の起草委員会では、家庭の教育力について新潟市の現状においてはどうか触れていくなかで、データの部分を出していこうということと、梅津委員から、自分たちが働いている学校現場ではこうだという意見が出てきました。そこで、この全体会の中ではいろいろな立場の方がいらっしゃいますので、いろいろな視点から意見をいただいて、それを踏まえて起草委員会の委員の方が、第1章を書いていきたいと思いますという話になっています。今日の間ではいろいろな視点から、皆様のかかわりからいろいろな状況をお聞かせいただければと考えております。

(笠原委員)

3章のところの、起草委員会の自由発言の下のほうなのですが、「データをとおして示す」の中に、「東区学習支援事業参加者数」とあります。これは、例として東区だけを挙げるということですか。

(生涯学習課長)

この学習支援事業参加者数というのは、現在、東区と北区、秋葉区で始まっていますが、一定の所得以下の世帯の子どもたちへの学習支援の取り組みです。したがって、区限定型の事業になっています。昨年からはじめた東区では一定のデータが出ているので、それを参加者数として示してほしいということだと思います。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。

全体として、1章でこの課題に取り組んだ理由みたいなものをいろいろと書いて、2章で、その結果、調査をして見えてきたことを書いて、3章で、それを基にして提案するという流れですね。提案のときには、有効な社会教育施設や社会教育団体等を入れて、こういうところを活用したり、結びつけたりしていったらどうだという提案の構成になるのではないかと思います。

1章の書き方なのですが、基本的には、新潟市の場合、家庭の教育は低下しているという危機意識を持って、社会教育委員会としては調査に入ったと言っているのですか。

(生涯学習課長)

その意識を持って調査に入ったところ、去年の調査の結果にもありますように、文部科学省のデータと比較したら、市民の中の意識としては10%で、低下したという意識は低いです。つまり、あまり低下していないのではないかと、新潟市民は感じているということです。

(相庭議長)

そうですね。現状とすると、問題意識としては低いのではないかと考えたのだけれども、意識としては高いほうであると。高いとは言えないけれども、国平均値よりは上だったということですね。そのデータはあるわけです。

第29期新潟市社会教育委員会議

いかがでしょうか。どなたでもけっこうでございます。

(新藤委員)

青少年の育成協議会としては、今、子どもたちの育成よりも親の育成のほうを力に入れているのです。やはり教育力はかなり低下しているというか、基本的に親として持つべきものをということで、かなり意図的に活動しています。スポーツ少年団でも子どもたちの指導というより、親たちが次の大会で任務分担をして、どうするという、親の基本的な活動を学ぶ場になっているので、その辺は、やはり教育力低下に対する、地域として、今までも子どもたちに有意義な時間を与えるための地域活動から、親に基本的な活動を教える活動に軸足が動いてきているような気がします。先ほどのアンケートではないですけども、子どもたちの活動をやっていないという変な回答が出たのは、多分、親のほうに頭が回ってしまっていて、子どもたちよりも、まず親に理解させるというほうに回っているんで、そういう回答が出たのではないかと感じました。

(相庭議長)

親たちが親になりきれないということでしょうか。そういうふうには理解してよろしいですか。

(伊藤委員)

今回、自分の地域のお祭りの運営というか、祭りを作り上げていく側を経験して感じたものは、今言ったように、若い親御さんは、その親から学んできていないものがあつたのではないかとすることは共通理解なのですけども、その親を教えるのは地域と、第1章の2行目に書いてありますけれども、上の方たちは自分たちのお祭りとか、この人とこの人には伝えていきたいみたいな意見も出ていて、最初はあまり気にはしていなかったのですけれども、その親の方たちに、本当に人として、親として、成長するためには、任せるといふことが大事なのではないかと、やっていながら考えて、上の方たちの都合のいいような人に任せるとはなくて、信じて、子どもさんたちのために自分たちで考えて、試行錯誤はあるけれども、その辺は少し上の先輩などが交流する。

そういう意味でも、地域の指導者の世代交代というものも、危険は伴うのですけれども、任せられて初めて失敗した中から、より多く第一歩、二歩と人間は成長するという、自分もそうだったような気がするんで、そういう意味でも、活動の場や交流の場というのが第3章にもありますけれども、それは若い親御さんも活動しやすい環境といいますか、あとは継続的なコーディネーターさんたちが学校などで活動する機会を持てるような、より入り込みやすい、若い親御さんの、自分たちの子どものために一歩、学校の中に入って見て経験してみて、最初はあいさつもできないのだけれども、親があいさつをしないから、体育館に行っても、子どももあいさつをしないのだなと気づいたときには、やはりまず信用して、人として伸びしろは膨大だと言ったらどうかなというのが、今年の私の気づきなのですけども、そのように場を作る。あとは、いいことは継続していただくというのがキーワードではないかと感じました。

(中村委員)

子どものためにとか、子どもの健全育成という前に、大人自身が分断されている状況にあるので、むしろ大人が楽しむという活動も、何かの役割とか、面倒くさいことを言わないで、純粋に大人が集まって楽しむということも大事なのではないかと思えます。例えばそこに子どもが入ってくるというか、今までは子どものために、子どもを主体にした活動がメインだったと思うのだけれども、その前にまず大人が楽しんじゃいましょうみたいなことも大事なのではないかと思えます。

(相庭議長)

私の経験からすると、私は女池ひまわりの会長の補佐までやったのですけれども、唯一子どもがかかわった中で、会長をやらなかったのはひまわりだけで、あとで保育園から全部やりました。そのときに、びっくりするのは、同級生のお父さん、お母さんが若いのです。私は32歳で子どもができたので、小学校に上がるときは40歳近かったのですけれども、一緒にそうめん流しをやったときのお父さんに、「いくつですか」と聞いたら、20代前半でした。「いくつでお父さんになりましたか」と聞いたら、17歳と言ったときに、その人たちに親としての自覚なんて、私が17歳のころは受験

第29期新潟市社会教育委員会議

勉強していましたし、保育園に子どもを預けた年が20歳となれば、まだ学生運動でけんかしていましたから、そう考えてみると、子どもを産む人たちというのは3人とか4人とかいるのですけれども、早くから結婚されているのです。どちらかという、大卒とかキャリアを持った人たちというのはわりと独身で走ってしまったりするので、平均的なといわれている親像は、今の日本では崩れていると言われているのですが、新潟でもそういう傾向が強いのだと思うのです。

先ほどの、大人たちの楽しみという意味は本当によく分かります。PTAなどで飲み会をして、女の人が唯一胸を張ってカラオケができるというのは、PTAの飲み会だけなのです。女池PTAなんて終わるのが1時半ですよ。「会長、そろそろ帰ろうと言おう」と校長が言って、「もうやめませんか」とは言えないので、「我々は明日がありますので」と言うと、「もう帰っちゃうの」と言われて時計を見たら1時半でした。それが唯一、お父さん、特にお母さんたちが胸を張ってストレス発散できる場なのだ。子どものためにといっても、私の記憶では、8時以降の会で子どもの話をしたことは1回もないです。どれだけお母さんたちが大変な毎日を送っているかよく分かって、そういう意味では、楽しむというのは大事なことなのだろうと思います。

(板垣委員)

PTAの役員になるときは、遠慮というか、いやだという顔をするのですけれども、1年間やって、仲間ができて、交流をたくさんすると、終わるときになると、やってよかったなど。またやろうねという感じですから、やはり交流することがいかに視野を広げたり、人間関係を広げたりするかということが分かりますよね。

(相庭議長)

PTAをやると本当に広がりますからね。3年経って、最近やっと会長と言われなくなりました。どこに言っても「よう会長」と。そういう元気のいい人たちが今の女池はもっていますけれども、それを考えると、人間関係が広がって、充実感を持つのでしょうかね。

(川上委員)

先ほどの大人の楽しみではないですが、入り口は子どものための入り口だったものが、回数を重ねて、お馴染みさんになってくると、自分たちの楽しみにすり替わっていて、あとは自分たちの余禄で盛り上がり、こういう学び、こういうおつき合いができてきたというのが、パートナーシップ事業で長年やっているところでは、大人のつながりで、新しい人間関係の構築なり、学びができつつあるのではないかと、現場にいると感じています。

(相庭議長)

PTAもそうですけれども、あまり子どものことを言わないほうがいいのです。やっているときは全然言わないようにしていました。だからうまくいったような気がします。どうしてかという、野球をやると強い子がいるのです。学力の話をする、利口な子、要するに学力の高い子と芳しくない子が出るので、なるべく子どものことは触れないで、触れるときは、あの子はいい子だと触れてあげる。必ず話題に出るときには、あの子はいい子ですねと。ほめるためには知っていなければなりませんから、あの子のお母さんがあれだなと学習していかないと、ほめられないのです。そうすると、あの副会長の娘さん、あの子だよなんていう話が出てくるようになる。そうすると、大人たちのネットワークがうまくいって来るみたいですね。

逆のケースもありましたけれども、副会長同士がほとんど座っているときに、こういうふうに向けて、口もきかないのに、子ども同士は親友だったとか、そういうことはいっぱいありますから、何とも言えませんが、ただ、大人社会が広がるときに、子どもを介して広がるのが一番広がりやすいというのは分かるような気がしますね。

ほかにいかがでしょうか。

ここでいろいろなお意見等を自由に出していただきませんか、建議を書いてしまってから、意見されるのもつらいものがありますので、この際出していただいたほうが楽です。いかがでしょうか。

第29期新潟市社会教育委員会議

(板垣委員)

少し恥ずかしいのですが、パートナーシップ事業の予算というのがあって、教育コーディネーター、これは地域教育コーディネーターのことですよ。コミュニティコーディネーター、これはよく分からないのですけれども。

(生涯学習課長)

公民館改革宣言ということをお聞きになったことがあるかと思いますが、公民館が地域に出向こうと。今まで公民館は館の中に入って、館中心に事業をしてきましたけれども、公民館の職員が外に出向いて、地域の中で活動していきたいと。地域の方とともに仕事をしていくのだという改革宣言をしたところ。それに伴いまして、地域の方とともにですので、地域の中心となっていただけのようなコーディネーターさんを地域の中に入れていただけるよう、コミュニティコーディネーターという名前で、核となる人材の確保に努めていきたいということが発端でございます。その核となる方と、公民館と一緒に地域づくりに努めていきたいということです。地域教育コーディネーターさんは、学校と地域を結ぶという役割を持っていらっしゃるし、学校から地域に発信していただいているわけですが、コミュニティコーディネーターのほうは、地域から全体を見て地域づくりを、地域には福祉の部門もありますし、いろいろな施設もありますので、そうしたものをつなぎながら、地域づくりに努めていくコーディネーターさんを構想しております。

ほかにもコーディネーターというのはいっぱいありまして、例えば地域福祉コーディネーターとか、これは社会福祉協議会の分野で担っているわけですが、いろいろなコーディネーターさんが地域にいっぱいいるということは悪いことではないだろうと考えています。ただ、緒に就いたばかりなので、これから先、スタートさせて、これから誕生するという段階です。

(板垣委員)

この話は先回も出ましたね。思い出しました。

(生涯学習課長)

主管は公民館長です。

(相庭議長)

これは新潟市独自の新しい試みですよ。

(笠原委員)

主管が公民館館長であるのに、この前質問したときに、コミュニティ協議会に置くというのが私は納得できないのです。

(生涯学習課長)

公民館は地域に出向く、地域とともに歩むという姿勢は大事にしていきたいと。そういうことになりますと、地域の中にはコミュニティ協議会がそれぞれの小学校区に置かれているわけですので、地域のコミュニティ協議会と公民館が連携しながらやっていかなければなりません。

(朝妻次長)

公民館のためのコーディネーターではないということなのです。公民館は手足になって動きますと。それで、地域の人たちだけに使ってくださいということで、地域のほうに軸足を置きたいということだと思うのです。教育コーディネーターが大変うまくいったということがありまして、これから一歩進めて、学校の段階、公民館から発信していく段階という中で、行政が地域の中で、地域の活力を盛り上げていく手法として、これも一つのチャレンジということで始めたと見ていただくとありがたいと思います。

(笠原委員)

前に、このような建議でしたか、意見答申が出たなと思って、私はそのときは委員ではないものですから、古いものを見ましたら、25期に、地域コーディネーターみたいなものが必要だという提言がされているのです。そのときには、もちろん、それは公民館のためではなくて、地域のためにそういう人が必要だと。それを公民館に置くという提言があったのです。学校には学校のコーディネ

第29期新潟市社会教育委員会議

ネーターを置き、地域の拠点となるところの公民館にコーディネーターを置こうという提言があったのを読んだものですから、それが少し引っかかっておりまして、ただ、そのときは社会教育主事ということになっていて、今は少し質が違うのですけれども、公民館の中で学校コーディネーターとタイアップして動けるような人という趣旨が前にあったのであれば、そのあたりはどうかというのが疑問になっています。

(邊見次長)

今年モデル事業的に、西区と西蒲区でコミュニティコーディネーターの育成事業ということでやっております。来年度は全部の区でやってみようということで、今、試行的な段階です。各区にはコミュニティ協議会や区自治協議会で活躍されている方が結構おられますので、こういった人材にも、コミュニティコーディネーターとして活躍していただきたいと思っています。

また、先ほど玉木課長からありました地域福祉コーディネーター、これは福祉部門を代表するような方も地域にあったらいいという考え方ですので、そういった方も含めて、どういった設置の仕方がいいのか。公民館に置くのか、コミュニティ協議会に置くのかも含めて、これからまたいろいろと意見をいただきながら、どういった形であれば、活動しやすいのか。地域教育コーディネーターですと、大概学校の中にスペースを持ってやっておられて、すごく分かりやすいのですが、そういったスペースなどの物理的なものも含めて、どういった形がいいのか、今モデル事業として進めていますので、そういう中で、いろいろなことを検討していきたいと思います。

(笠原委員)

分かりました。ありがとうございました。

(相庭議長)

ほかにいかがでしょうか。大丈夫でしょうか。

(笠原委員)

もう1点、書いていくときに否定的な回答があるのが気になるのです。子どもたちとかかわる活動をやって「良かったことはなかった」とか「子どもたちとかかわる活動を行う必要がない」という意見が、少数ながらあがっています。そうした否定的な意見の根拠がどこにあるのか、自由記述の中からひろうなどして調べてほしいと思います。

(相庭議長)

実は、否定的な意見というのは貴重な意見なのです。

(笠原委員)

ところどころに、「良かったと実感できるようなことはとくにない」という意見が挙がっているのが気になっていますし、こここそ見過ごしたくないところだろうと思いますので、お願いします。

(相庭議長)

なるべく拾うようにします。

ほかにいかがでしょうか。

(伊藤委員)

今、笠原委員がおっしゃったように、やっていて大変だったから、マイナスな意見などいろいろな経過もあって、そういう意見が出てくるという想像もできるのですが、今、どこにいてもこの人がいるのではないですけれども、新しい、よかれと思って、教育力をためるためにいろいろな場を作ったり、仕組みを作ったりしていくときに、例えば学校の校長先生などは、この時期になると、あそこそことと、いろいろな組織を作ると、どこにもでも顔を出す役職なので、本当にお忙しくなって、学校の子どもの顔を見る時間が減ってしまう時期もおありだと想像します。携わっている委員が、この役目も、その役目とやっている方たちも、ときには地域でお見かけすることあります。やはり若い人へ委ねる転機というものも必要なと。

先ほども同じことを言ったのですけれども、新しく地域の家庭の教育力を高めるためには、新しく考えて、一緒に一歩ずつ歩む人たちを、そういう機会を設けていくという意味では、この人はこ

第29期新潟市社会教育委員会議

れをやっていたからまた頼もうというの、行政の方たちは人を探すのは大変だということも分かっているのですけれども、いろいろな人に経験をやる場を、いろいろな意味で、子どもさんたちを支える場所の協力者でも何でもいいのですが、大変な方たち自身に子どもたちと一緒に考えて歩んでもらいたいという場面もありますから、能力があるから、この人にあれもこれもではなくて、あいさつのできない人かもしれないけれども、やりながら、人にもあいさつしようという人にやがてなっていくかもしれないので、そういう意味では、いろいろな人に経験の場を与えてもらいたいというのを、意見として持っているところです。

(相庭議長)

人材の流動化ですね。新しい人材の需要を図るというのは賛成ですね、

(伊藤委員)

固定化しないでほしいです。

(相庭議長)

そのような意見もどこかで、特に3章で取り入れることになるのではないかと思います。

今後また意見を少しずつ聞いていくということもあるので、大体このような感じで、建議の方向についてはまとめていくということでご了承願えるでしょうか。

では、建議につきましては、今、さまざまな意見も出ましたので、その意見をまとめていくという方向で、事務局のほうでメモを取っていますので、それを基に作っていくという形をとりたいと思います。

それでは、建議につきましては以上です。

それでは、西田委員が見えられましたので、もとに戻りまして、「各種大会の参加報告」ということをお願いしたいと思います。報告にあたりまして、53回全国社会教育研究大会京都大会の報告を笠原委員、西田委員、平成23年度新任社会教育委員等研修会につきましては伊藤委員からの報告を予定しております。

まず、笠原委員からお願いします。

(笠原委員)

京都大会に参加させていただきました。ありがとうございました。当日は台風の接近で、参加者の足に少し影響が出たようでした。大会の運営面なのですけれども、協賛が多いのにびっくりしました。いわゆる広告です。いただきました冊子もかなりのページ数で、数えてみましたら、団体209、個人で130、合計で339件の広告を取っているのです。ですので、事務局や実行委員の方は大変だっただろうと思いました。法人資格が変わったところで、九州大会以降、協賛を増やすというのは一つの目標になっているようですが、特に今回はすごい量だなと思いました。

大会そのものの内容ですけれども、1日目は、基調講演とシンポジウムでした。どちらも震災がテーマでして、大変示唆に富んだものでした。二日目に、ポスターセッションと分科会があったのですが、ポスターセッションというのは、発表者が自分のかかわっている活動を1枚のボードに貼り出し、参加者と自由に意見交換をするというものでした。二日目は早めに会場に行って、すべてのポスターを見て回って、担当者とも話してみたのですけれども、その中で、成人式の取り組みというものに注目いたしました。

新成人が実行委員会を立ち上げるというのは新潟と同じなのですけれども、実行委員の数が格段に多いというのが目を引きました。新成人式大賞審査会というところに、毎年、応募しているのだそうです。そのことによって、去年は努力賞だったけれども、今年はぜひ大賞を取りたいとか、去年は大賞だったから、今年も絶対に大賞を取らなければだめだというのが皆さんあって、そういうことがいい目標になったり、やりがいになっているのだなという感想を持ちました。

次に、分科会なのですが、福岡と大阪と和歌山の発表がありました。この3人の話の中に共通しているものが二つありまして、一つが、会議の時間の中で報告を聞く時間が長すぎるというのが問題点として挙がっていました。このことについて、大阪と和歌山が解決策を講じていまして、大阪

第29期新潟市社会教育委員会議

では、報告内容を事前に郵送してもらおう。会議の中でそれを読み上げることはやめてもらったということです。和歌山のほうは、報告時間を25分以内にすると取り決めたそうです。もう一つの共通点が、三つとも自主学習会を開催しているということでした。和歌山の場合は、合併した後で小さい公民館がどうも元気がないということで、そういったところの館長さんと話し合いの場を何回か持っているということでした。それと反対に、大阪なのですけれども、館長さんなどと話してもしかたがないのではないかとということで、実際に現場で働いている実務担当と話したほうが、より問題点が明確につかめるのではないかとということで、現場の担当者と事務局と社会教育員と研修会、交流会を持っているという話でした。

話を聞いていまして、どちらも、根底にあるのが、事務局は準備要員でもないし、報告要員でもないというとらえ方をしているのが、私が注目したところでした。

最後に、和歌山が、日本一の生涯学習推進計画を策定するのだそうで、そのためには、日本一の社会教育委員を目指すと言いましたので、そうかと、むらむらと対抗心を燃やしてきました。

次期開催地なのですけれども、平成24年10月25日、26日、山梨県の甲府市で行われるそうです。パンフレットができておりましたので、もらってきました。事務局に出しておきますので、関心のある方は後でご覧いただきたいと思います。

(相庭議長)

ありがとうございました。

むらむらと対抗心を燃やして、成果の多い研究会だったのだと思います。

では、西田委員、よろしくお願いします。

(西田委員)

今回、ありがとうございました。様式に収まらず、4枚になってしまいましたけれども、基調講演とパネルディスカッションは笠原委員の言われたとおりです。二日目の分科会ですけれども、両方とも佐賀県の事例だったのですが、市村自然塾、これは関東にもあるのですけれども、年間6,000万円くらいの企業協賛があって、職員が11名で、やるほうは毎週やっているのですけれども、男女交互にやっていますので、行くほうは隔週になるのですけれども、金、土、日で田舎に泊めて、農業体験を中心に、1年間同じメンバーで共同生活をするというプログラムを行っていて、けんかも当然起こるわけですが、兄弟、姉妹が少ない状況の中で、非常に効果的だと。企業から協賛を得て行っているということで、設立の経緯は私もそうだったのですけれども、今後、私どのNPO法人はもう少し企業の協賛等も含めて考えていかなければならないと。この間、企業の方が来られて話を聞きましたけれども、企業からの協賛という道もあるのではないかと、非常に学びが大きかったです。

もう一つは、ポスターセッションなのですけれども、私も開始前に一通り見て回ったのですけれども、こちら佐賀県の神埼市ですが、家庭教育支援チームというのを4名くらいでやっているのですが、50代くらいの、子育てが終わった方が4名、男性1名と女性3名なのですけれども、いろいろな活動をしています。要はおせっかいをしているわけですが、居場所をやったところにこういうものがあつたらいいのではないかとことひたらすら実行するわけです。講座だったり、座談会ですとか、企業から話を聞いてみたりということ全部ひたらすらやっていくということなのです。

私が一番すごいと思ったのは、添付にある、子育て悩み相談マップというのがあるのですけれども、こちらマップは、よくあるイエス、ノーのチャートになっているわけですが、これは、自分が悩んでいて、何を悩んでいて、それでどこにいきたいかということが通じるわけですが、こういうものはよくあるのですけれども、私はすごいと思ったのは、徹底してこれを何回も配るとことなのです。チャンスがあれば配ると。校長先生のお便りの裏にもマップが印刷されていて、裏返すとこのマップが載っていると。きれいな冊子で作るパンフレットがあるのですけれども、結局見ていない、あるいは1回見ても、いいかなということは起こりえると思いますので、

第29期新潟市社会教育委員会議

そういうときに、こういうふうに徹底して、何度も、白黒でいいので、配布を続けていくというのは非常に重要。

引きこもりやニートをどうしたらいいかということに関しても、何度もしつこく、学校に行っていないので効果は分かりませんが、何度もそのようなことをやっていくということで、私も西区に二つございます子育て応援施設の代表の方とお話すると、自分たちの活動が本当に必要としている人に届いているのかどうかということ、非常に心配しておられるというか、ジレンマを抱えていらっしゃるのです。居場所をやっているのだけでも、本当に必要としている支援が届いているのかということで、ドリームハウスの新保さんなどは訪問事業をやろうということは言っているわけです。それでも届いているのかということもありますので、そういった面からも、このようなチャートでなくてもいいのですけれども、民間などいろいろな施設がありますけれども、あらゆる施設を一つにまとめたようなものをつくって、それを徹底して配布していくような、知らせるというようなことを新潟市でもやれるのではないかと、非常に感じてきました。

全国大会に初めて行ったわけですが、圧倒されて、全国の事例はすごいなと思って、しびれて帰ってきました。また、頑張りたいと思います。おせっかいというのが今回のテーマでしたけれども、それぞれ分断された社会の中で、一人一人が、先ほどのコーディネーターの話ではないですけれども、住民一人一人の人がコーディネーターのような役割を、このおばちゃんたちは別に頼まれていないのだけれども、いいお医者さんがあるといつて、それが車で1時間くらいのところなのですけれども、でも、とりあえず、そこに行って話を聞いてこようといつて行くらしいのです。途中でおいしいパン屋さんがある、その情報などもあげて、おいしいパン屋があるから行ってみなということをするのです。仕組みとしてのおせっかいが成り立つようなものができたらいいのではないかと強く思って、いろいろな学び、できることがいろいろあるなと思いました。ありがとうございました。

(相庭議長)

ご苦労さまでした。京都まで、遠路はるばるお勉強にしに行っていたきまして、大変助かりました。

(笠原委員)

一つ余談なのですが、シンポジウムの方が4人だったので、皆さん、はじめのごあいさつのときに、時間を超えて一生懸命お話しされるのです。それで時間がなくなってしまって、その後のやり取りというのが何もなくて、コーディネーターの方が、基調講演の方を4人呼んだようなものでしたと締めたのが、何ともおかしかったです。

(相庭議長)

これはどう見てもしゃべりそうですね。

(笠原委員)

何分も超えていますので、話のやり取りは全くなしでした。

(相庭議長)

宮本さんとか内藤さんですもんね。黙っているというほうが無理だと思います。

続きまして、8月に行われた社会教育委員等研修会につきまして、伊藤委員からよろしくお願ひします。

(伊藤委員)

8月4日、社会教育委員等の研修会に参加してまいりました。委員の資質向上が目的ということで、私自身の資質向上が目的ということで、私自身の資質がこれから向上するようにと願ひながら、集中して参加してまいりました。内容については、研修1ということで、東京学芸大学の芸術スポーツ科学系の松田教授のお話を聞きました。数字を基にした詳しい資料で順序立てて、私たちの頭の中に社会教育とはということで、大変いい勉強になりました。なぜ生涯学習なのかとか、資料を基に非常に丁寧に、スピーディーな中でよくまとまっていた。途中で印象に残ったのは、コン

第29期新潟市社会教育委員会議

ピテシーという、先ほどのあいさつではないですけども、人間としての生きる力、能力とは言ってもいろいろな知識や能力だけではなくて、心理的、社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で、複雑な要求課題に対応することができる力というふうに詳しく書いてありますけれども、生きる力が大事なのだということを、非常に印象深くお話を伺いました。

研修2ということで、ワークショップはかなり濃縮した活動だったのですけれども、一人5枚ずつの社会教育委員としてやってみたいことというものを、グループに分かれて5枚ずつ書いたものを、リーダーのもとに、記録の方が中心となって、それぞれ各人の5枚を振り分けて、10グループ、あとでポスターセッションのようにまとめたものをお互いに見あい、表現しあい、お互いに説明したり、聞きあったりして、最後、時間が足りなくなるような中だったのですけれども、各グループの個性ある資料を後ほど県からちょうだいしました。教授の資料と、各10グループのまとめたものを、事務局にコピーを置いておきますので、興味のある方はご覧ください。感想として、下のほうにまとめましたけれども、私自身、社会教育委員としてひよこだと思うのですが、中身の濃い内容でした。

新潟市からは私一人だったので、始まったときは少し心細かったのですけれども、中盤のワークショップからは、その日初めてあった人と、まるで今までも友達だったかのように、年齢を超え、世代を超え、性別を超えて、集中してワークショップをいきいきとできたことが印象深かったです。これからもこのような勉強の場がありましたら、可能な限り参加し、資質を高めたいと思います。よろしくご指導ください。ありがとうございました。

(相庭議長)

ご苦労さまでございました。

今、お三方からご報告がございましたけれども、委員の方から質問等はございませんでしょうか。
(中村委員)

このマップというのはいいなと思ったのですけれども、これは、子育てとといったときにどのくらいを対象にしているのですか。わりと上のほうですか。赤ちゃんとか幼児とかというのは。

(西田委員)

小学校くらいまでだったと思います。

(中村委員)

新潟市だと、教育相談センターであるとか、発達障がい支援センターとか、それぞれの地域性が入ったところが多いと思うのだけれども、どちらかという、小学校低学年くらいですか。

(西田委員)

そうですね。それを主にしているようです。

(中村委員)

すごくいいですね。学校などで問題を抱えているときに、学校内だけではなかなか大変だから、外部機関の専門家と連携するというのがすごく課題になっているのだけれども、その連携というのが、口で言うのは簡単なのだけれども、スクールソーシャルワーカーさんが入って、そういう点では前よりも進んだなとは思っているのだけれども、学校がいろいろなところにつながっていくという難しさがあると思うのだけれども、いろいろある機関を親がどう定めていくかというのは非常に難しいと思います。このように、学校がどうすればいいかというのと、親がどうすればいいかという視点両方から攻めるのはすごくいいと思います。ただ、幼稚園、小学校よりも一番悩んでいるのは中学校と高校あたりだと思うので、そこらへん用のマップというのものもあるといいかなと思います。

(西田委員)

やろうと思えばできるわけですね。

(生涯学習課長)

やる予定ももっています。

(朝妻次長)

第29期新潟市社会教育委員会議

若者支援センターみたいな形のところになるのです。ここまでですと、保健所や幼稚園、学校、保育園というところで、市がやっているところと全部連携できるようにネットワークがある中で、インフラの中で使ってやっていけるのだけれども、高校へ上がっていってしまうと、県立高校が多かった、学校としてのつながりとして、新潟市教育委員会がどこまでかかわっていけるかというところに入ってくるので、今のところは、この前できた「オール」とか、そういうところを核にしてどれくらいできるか。あるいは公民館など、地域に入っていくと、ここまでいくのはなかなか難しいですから、どこで拠点を求めていくかというのは別の算段になってきて、ギャップはあると思います。

(中村委員)

ここに行けばいいというかね。

(西田委員)

すごく小さいまちだからということもあると思うのです。

(中村委員)

この地域だったら、ここに駆け込めば、とりあえずいろいろとつないでもらえるというところがね。

(朝妻次長)

小さい自治体というのはその辺がいいのです。役所もあれば、診療所もあれば、保育所もあれば、公民館もあれば、図書館もそこにあるという、同じ建物だったり、そういうことがあるので、その辺のフットワークと、大きな組織のフットワークをどうするのかと。

(中村委員)

各区ごとということももちろんあるでしょうね。やはり中、高はどうするんだみたいな、そこら辺のところはやがては切り込んでいかないと難しいのだろうなど。

(西田委員)

配る方法論がまた難しくなりますよね。

(中村委員)

とりあえず、小さいうちに解決できるものは解決しましょうという、その趣旨はいいと思うのだけれども、

(伊藤委員)

紙を配るのも大事なのですけれども、例えば北区の相談室は、県立豊栄高校の隣にあって、中身の機能は、合併前よりも仕組みは弱まっているかもしれないけれども、先ほどおっしゃったように、各区に、18歳までの子どもが相談する場所というのがあって、親が、小さいときから相談するときにあそこがあるよという口コミで定着してもらいたいかもしれないし、学校の中に相談できる場所を設けて、親に子どもについての相談を持ちかけようとしても、耳を閉じてしまう親もいるわけだから、子どもたちが小さいときから、あそこは親の悩みの駆け込み寺みたいにしたほうがいいのではないかなと思います。

(西田委員)

でも、そこに行くにはすごく勇気がいりますよね。越えないと行けない、ハードルが高いと思うのです。自分が悩んでいるということを認めたくないという心理もあると思うのです。

(中村委員)

だけれども、親が困っているときに、周りの人が駆け込めるといってね。

(伊藤委員)

親だけが抱え込まない場所というのが絶対いるわけだから。

(西田委員)

それはやはり、民間の施設も含めて検討しなければいけないのではないかなと思うのです。沼垂の野菜を売っているところ、「伴走舎」みたいに、ぶらっと行って、実はというようなのが必要だと思

第29期新潟市社会教育委員会議

います。

(相庭議長)

この話題も話し出すと、私も好きなのですけれども、いつも社会教育だのPTAだのが入るとエンドレスになって申し訳ありません。

いろいろとご意見、ご質問等が山のようにあるとは思いますが、時間でございますので、この辺で区切らせていただきたいと思います。

「その他」の事項でございますが、事務局より何かあれば、お願いいたします。

(事務局)

前回の会議でも決まらなかったのですが、11月18日につくば市で開催される第42回の関東甲信越静社会教育研究大会に、板垣委員から行っていただくことになりました。玉木課長が同行します。また、今回から公民館の大会等と合同で行うということで、中央公民館の和田館長と運営審議会の方も参加されると聞いておりますので、よろしくをお願いいたします。

(相庭議長)

それでは、板垣委員、よろしくをお願いいたします。また、玉木さんもいらっしゃるのですか。ご苦労さまです。

予定していた議事は以上をもちまして終了です。事務局にお返しします。

(事務局)

ご審議ありがとうございました。あと一つ、お知らせをさせていただきたいと思います。カラー刷りのチラシをお出しいただきたいと思います。山下課長、よろしく申し上げます。

(中央図書館サービス課長)

中央図書館の山下です。お時間をいただきまして、お配りした、ブックスタート開始記念事業についてPRさせていただきたいと思います。

ブックスタートというのはイギリスで始まった運動で、赤ちゃんと保護者に対して、実際に絵本の読み聞かせを行い、それだけではなく、絵本をプレゼントして、家庭でも読むことができるようにというものです。読書活動の推進だけでなく、日本においては、親と子のつながりを深める一つの道具という要素を強く持っております。今、全国では4割強の、新潟県内では7割くらいの自治体で実施しています。新潟市は今年から開始いたしまして、6,600人の赤ちゃんと保護者に対して、1歳誕生歯科検診の場で、一組一組に読み聞かせを行っています。伊藤委員にもボランティアとしてご協力いただいております。

その開始記念事業ということで行う内容が、細谷亮太さんの講演会と対談です。細谷亮太さんは、聖路加国際病院の副院長で、小児がんの子どもたちに対する活動などで非常に有名な方です。前半のほうは講演をいただきまして、後半の第2部では、細谷先生と黒井健さん、この方は、新潟市生まれの絵本作家で、「ころわん」などたくさんのシリーズを書いている方ですが、中央図書館の「こどもとしゃかん」の名誉館長にもなっております。篠田市長がコーディネーターで対談を行うことになっております。まだ今ならご参加いただけます。ぜひ、周囲の方にもお勧めいただけたら幸いに存じます。よろしくをお願いいたします。

(相庭議長)

10月10日の祝日だそうでございますので、お時間のある方は、友達等を誘ってご参加願えればと思います。

(事務局)

ありがとうございました。

最後に、玉木生涯学習課長から閉会のあいさつを申し上げます。

(生涯学習課長)

長時間にわたり、大変ありがとうございました。これからも起草委員会、調査のまとめなどいろいろとございますけれども、今後ともよろしくをお願いいたします。

第29期新潟市社会教育委員会議

本日は、大変ありがとうございました。

(事務局)

ありがとうございました。

次回の会議の日程でございますけれども、11月29日(火)午後2時から、本庁舎3階の対策室1会議室で予定しております。予定を差し繰りのうえ、ぜひご出席いただきたいということで、ご案内を申し上げます。

以上をもちまして、第29期社会教育委員会議第9回を終了します。

お気をつけてお帰りください。ありがとうございました。